

壁穴の受け、匿名の獣人たちに初めてを奪われ中出しで屈する

R18

2026・10・4

目次

第1話 札は二十三番

第2話 体に聞く

第1話 札は二十三番

夜市のいちばん奥、布を売る屋台の裏に、その小屋はある。

受付に座った棕は、あくびをかみ殺しながら札を出した。

「二十三番。今夜はあんたの番号ね」

「……名前は、書かなくていいんですか」

「書かない。顔も見せない。ここはそういう店」

棕は札を受け取ると、角をきっちり折った。里の者がよくやる折り方だった。棕はそれを見たが、何も言わなかった。

棕は二十三になる。肩も腰も細いのに、歩くときだけかかたが重い。畑を歩いてきた足

だ。

「言葉、きれいだね。里のなまり、消してるでしょ」

「……消してます。僕がどこの者か、分からないように」

「ふうん。まあ、がんばって」

棕は二十六で、この受付に座って長い。客の足音を聞けば、だいたい誰だか分かる。

「聞いてた話と、同じですよ。壁の穴に、腰を当てるだけ」

「そう。向こうは獣人の客。溜まったのを出しに来る。あんたは受けるだけ」

「僕の体のことは」

「札の色で向こうに伝わってる。あんたみたいな体の子が目当ての客しか、今夜は入れて

ない」

柊ののどが動いた。耳の先が赤い。

「里に知られたら、僕は帰れなくなる」

「だから名前を聞かないんだよ。聞かれても
言わなきゃいい」

棕はたれ幕をあごで指した。

中は狭かった。板の壁に、革でふちを巻いた丸い穴がある。床には赤い線。柊は靴をぬいでそろえ、線の上にひざをついた。

穴の向こうで、爪が板をかいた。

「来たか」

のどの奥でうなるような、低い声だった。
鼻を鳴らす音が続く。

「……甘い匂いだ。もう濡れてるな」

「ぬ、濡れてません」

「うそをつけ。下をぬいで、こっちに向けろ」

柊はベルトに手をかけたまま固まった。

「急がせないでください。自分で、やります」

「待ってやる。逃げるなよ」

ズボンと下着を、ひざまでおろす。体はほぼ男なのに、へその下だけが女のつくりだ。平らな股の間で、割れ目がぴたりと閉じている。冷たい空気がふれただけで、そこがひくっと縮んだ。

柊は床に両手をついて後ろを向き、尻を穴の高さに合わせた。

熱い息が、まんこにかかる。

「ひっ……♡」

「閉じてるな。使ったことがないのか」

「あ、ありません……っ」

「そうか」

ぬるり、と長い舌が割れ目をなめ上げた。

「んあっ♡ な、なに……っ♡」

「ほぐしてやる。このままじゃ入らん」

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ。ざらついた舌が、ひだを開いていく。小さなクリに舌先が当たるたび、柊のひざが線の上ですべった。

「や、そこ♡ そこだめです♡ へんな声、出る……っ♡」

「出せ」

「出しませんっ……んんう♡♡」

片手で口をふさいでも、鼻から声がもれる。まん汁が太ももを伝って落ちた。

たれ幕の外で、棕は受付にほおづえをついていた。もれてくる声を聞きながら、あの爪の音には覚えがあるな、と思った。口には出さなかった。

舌が離れた。

かわりに、熱くて硬いものが、ぬれた入り口に押し当てられる。柵の背中がこわばった。

「名を言え」

「い、言いません」

「なら、体に聞く」

第2話 体に聞く

「ま、待ってください。大きい……そんなの、入らない」

「入る。おまえが濡らした」

柊は肩ごしに振り返って、息をのんだ。穴から突き出たちんぽは、自分の手首より太い。その先が入り口を押し広げる。

「あ、あ、あぁっ♡ ひろがる……っ♡」

「力を抜け。息を吐け」

「は、はぁっ……♡ むり、むりです♡」

「無理じゃない。ほら、飲みこんでる」

ずぶ、ずぶぶ、とちんぽが沈んでいく。初めて開かれたまんこが、きゅうきゅうと締ま

った。柊は床に爪を立て、ひざを線に押しつけた。逃げない。自分の足で来たのだ。

「全部、入った」

「う、うそ……おなかの奥、当たって……♡」

「ここが、おまえのいちばん奥だ」

こつ、と突かれる。

「んおゝっ♡♡」

自分の声に、柊は目を見開いた。あわてて口を押さえる。

「いい声だ。外に聞かせてやれ」

「いやです、外に人が……っ♡」

「受付の兄ちゃんか。あいつは聞くのが仕事だ」

たれ幕の外から、棕のたるそうな声がした。

「聞こえてるよ。気にしないで続けて」

「き、気にしますっ……♡」

腰が動きだした。ぱちゅ、ぱちゅ、ぱちゅ。ぬれた音が小屋にひびく。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ だめ、うごかないで♡」

「動かしてるのは、おまえの腰だ」

「ちが、ちがいます♡ かってに……っ♡」

本当だった。柵の尻は、穴に向かって自分から押しつけていた。奥に当たるたび、頭の中が白くなる。

「里の匂いがするな、おまえ」

柅の息が止まった。

「土と、麦わらの匂いだ。北の里だろう」

「ち、違います。知りません……っ」

「名を言えば、やさしくしてやる」

「言いません♡ ぜったい、言わな……あゝ
っ♡♡」

ごちゅん、と奥を突き上げられた。まんこ
がびくびく震え、まん汁が床にしぶく。

「イったな。初めてのくせに」

「イって、ない……♡ イってません♡」

「じゃあ、認めるまでやる」

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅっ。速くなる。
壁がきしむ。柅は床に額を押しつけ、よだれ
をこぼした。

「くる、なんかくる♡ おく、あつい♡♡」

「出すぞ。中で受けろ」

「な、中はっ……だめ、赤ちゃんできる♡」

「そのための体だろう」

びゅるるるっ、びゅーっ、びゅくっ。

熱い精液が、奥に叩きつけられる。

「あゝ あああっ♡♡♡」

柊はもう口を押さえられなかった。おなかの奥が重く、熱い。ちんぽが抜けると、白いのがとろりと太ももを流れた。

「……名は、言いませんでした」

ふるえる声で、柊は言った。

「ああ。がんこだな」

足音が遠ざかる。柊は床にひじをついて、肩で息をした。これで終わりだ。金をもらって、宿に帰れる。

たれ幕の外で、棕が言った。

「二十三番。次のお客、もう並んでるけど」

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 壁穴の受け、匿名の獣人たちに初めてを奪われ中出しで屈する

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・10・4

レーティング R18